不思議な（非）日常

ダメすぎる人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な（非）日常

【Nコード】

N3813Z

【作者名】

ダメすぎる人

【あらすじ】

これぞまさしく理想の高校青春ライフ！！！！

序章

落ち着いた雰囲気流れる住宅街。

その一角に、その落ち着いた雰囲気を見事にぶち壊す古い屋敷がある。

ぼろくも無く、汚くも無い。庭もそれなりに手入れがなされていて、外から見たら何も問題ない。

だが、なんかその屋敷の周りだけどこことなく薄暗いのだ。

外見に問題は無い。ただ、なんとなく不気味な雰囲気が漂っている。まともな外見が不気味さをより一層際立てる。

怪しさ満点の屋敷だが、何かコレといった噂話は流れていない。

普通に人も住んでいる。だが、雰囲気が普通じゃない。

そんな怪しい屋敷の前に、一人の少年が立っていた。

第一話 「こんなのもありだよな?」 「めん、やっぱり無しで。」 (前書き)

くどい文でちんたら進んでますが最後まで読んでくださると嬉しい
です。

第一話 「こんなのもありだよな?…いめん、やっぱ無しで。」

時はとある年の11月中ごろ。昼過ぎの日曜日。

穏やかな雰囲気漂う住宅街の、家と家に挟まれた通りを、青いリュックを背負った少年が、地図が書かれたメモを片手に歩いている。少年は、幼さの残っている顔つきをしている。髪は目にかかる少し手前で切りそろえられていて、少し立たせている。身長は170cmあるかないかというところ。要約すると、どこにでもいそうな高校生くらいの少年だ。というか、高校一年生だ。名前は、やまがみ山上いちろう一路。

一路は、地図と周りを確認しながら歩いている。すると、目的の場所に着いたのか、一路は立ち止まる。目的地は大きな建物だった。

「うわ…」

一路は、地図に書かれた場所に到着した途端絶句して固まってしまった。

一路の目の前にあるのは西洋風の古そうな大きな屋敷。建物の外装に問題は無い。庭もキッチンと整えられている。敷地の入り口の格子の門にいたっては錆び一つ無く、太陽の光を浴びて鈍く光っている。

だが、どこことなく薄暗い。

日の光が当たってないわけではない。何か、湿ってどんよりとした空気が屋敷全体を包んでいるのだ。

まるで、お化け屋敷ようだ。キレイな外装に、似合わぬ薄暗い雰囲気の不気味さを作り出す。

この屋敷には霊的な何か、もしくは、怪物的な何かがある。一路は直感でそう思った。

念のため、地図と周りを何度も確認した。しかし、自分の目的とする建物は目の前にある屋敷で間違いない。それに、駅から一度も曲がらずに来れる場所なので、自分がよほどの方向音痴じゃない限り道は間違いようも無い。

一路は、首だけを動かして自分が来た方向から逆の方向を向いた。どこまでも続く、横幅車二台分の長い道。そして、その道に面した、平和で一般的な家々。首を戻して目の前の屋敷を再度見る。

「はあ……」

一路は、この不気味な屋敷が自分の下宿先だと思つたと自然と口からため息が出た。

と、男の声が返ってきた。

「え？あ、はい。」

何で見てないのに俺だと分かったんだろうか。と、考えながらドアを開けて中に入る。

入ってみると誰もいなかった。

玄関ホールの端から端まで確認したが、人はいなかった。

玄関ホールは広がった。

少し先に真っ直ぐ行ったところに上りの階段があり、両サイドにはそれぞれ奥へと続く廊下がある。多分、屋敷の一階を外回りにぐるりと一周できる廊下だろう。

今、一路の足元には赤いマットが敷いてあり、三步ほど進んだ先に「土足厳禁」と書かれた看板が置いてあった。その看板よりさらに二歩ほど進んだ先には、白と黒のタイル張りの床が高窓から差し込んだ陽光を反射している。マットの両サイドには壁に隣接する形で下駄箱が置いてあった。

玄関ホールの中に、一路の目を引くものがあった。

「土足厳禁」の看板の少し先。玄関ホールの真ん中。

そこに二mくらいの高さの細長い石柱があり、その一番上で鷺のブロンズ像が鎮座している。

羽をたたみ、石柱のてっぺんで休んでいる鷺のブロンズ像。

一路は芸術作品に詳しいわけではない。世界的に有名な作品をいくつかが知っている程度だ。

だが、そんな一路にも分かるほどに鷺のブロンズ像は美しい造形物だった。

一路はその造形物に命を感じた。無機質な物とは思えない存在感が、鷺のブロンズ像にはあった。

「よくきた、少年よ。外は寒かっただろう。」

「は？」

と、いうより――

「先ほども言ったが、話はこの家主から聞いている。が、生憎家――」

ブロンズ像は生きていた。

「うおわあああああああああ！！！」

突然の一路の叫びに驚のブロンズ像（？）も驚き、動かないはずの翼を広げる。

いつでも飛べる体勢をを驚は保ちつつ、驚のブロンズ像は動揺しつつ一路に聞いた。

「ど、どうした！？少年！？」

「え！？は！？何！？どゆこと！？何！？何！？何！！！？何！！！？！？？？」

いきなりブロンズ像が喋り出した挙句、動き出したのだから一路の脳は混乱の極みに達しかけていた。

絶句して固まっている一路とは対照的に驚のブロンズ像は落ち着きを取り戻していた。

「ふむ、少年。その様子だとこの屋敷の説明は受けてないな？」

「せ、説明？なんの？」

一路も少しだけ落ち着きを取り戻しているが警戒は解かず、体は身構えたままだ。

「聞いていないのだな、この館の特殊な一面を。全く、あいつのいい加減さと来たら…」

状況を飲み込めていない一路を置いて、鷲のブロンズ像はもごもごと独り言を言い始めた。独り言というよりは愚痴に近いが。

落ち着きを取り戻した一路は考える。

（なにか出そうな屋敷だとは思ってたけどホントに出たよ…どうしよう。なんか友好的な感じもするけど、逃げるべきかな…）

一人思案する一路に鷲のブロンズ像は声をかけた。

「まあ、驚くのも無理はないが…とりあえず落ち着け。少年に説明をし忘れたばかりか、今ここにいさえない家主に代わって、この特殊な一面について説明しよう。」

そう言つと鷲のブロンズ像は羽を羽ばたかせ、浮上した。

「付いてきなさい少年よ、部屋の間所も聞いているから案内してやろう。少し長話になるからな。腰の下ろせる場所がいいだろう。」

鷲のブロンズ像が飛ぶという凄まじい光景を見て、もう一度驚く一路だが、さっさと階段に向かう鷲のブロンズ像を見て慌ててついていく。

一路は付いていくこと理由は、鷲のブロンズ像から害意は感じなかった事。それと、それ以上に少しこの館に興味が湧いたからだ。

最初は驚いていた一路だが、一路自身すこし特殊な環境にるため、

適応能力は高かった。

「あの…えっと…」

一路は、口ごもりながら階段の手前に差し掛かった鷲のブロンズ像に声をかけた。

鷲のブロンズ像は、一路の言葉を待つように空中で静止した。

「お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

「ジヨウモンと名付けられている。あと、敬語はやめてくれ。こそばゆい。」

ジヨウモンと名乗った鷲のブロンズ像は、普通の鷲にも出来ないような、人間のような穏やかな笑みを一路に向けた。

心に温かみを感じる優しい笑みに、ようやく表情がやわらかくなる一路。だが、ここで違和感を覚えた。

(ブロンズ像に…ジヨウモン？ジヨウモンって縄文？…ん？)

疑問が渦巻く一路の脳内。ジヨウモンに部屋を案内されながら少し考えた。

ブロンズ像から置物を連想し、ジョンモンと結びついて縄文土器が頭に浮かび上がった一路。

関係ないかもしれないが、なんとなく探りを入れてみることにした。

「ブロンズ像なのにジヨウモンって、なんだか面白いね。」

なんとなく、そして軽い調子で尋ねた一路だが、ジヨウモンの動

きが止まった。本当のブロンズ像のように固まる。

ジヨウモンはこちらを向かない。代わりに、ジヨウモンを中心に妙な空気が流れ始める。

触れてはいけないものに触れてしまったような。なんとなく気ま
ずい、重苦しい空気。

そして、一路はそこで気づいてしまった。

玄関ホールに陽光を取り込んでいる高窓。その光に当てられたジ
ヨウモンは光を反射していない。近くで見れば分かるが、ジヨウモ
ンの体の表面は荒れていて、手触りがざらざらしていそうだ。

鷲の像といえば、ブロンズ像とか、普通の偶像だったり。とにか
く洋物のイメージが強い一路。しかし、どうやら実際は違う。

「まさか……」

一路は、ジヨウモンの名前の由来を知った。

同時に、自分が地雷を踏んだことも理解した。

なんとなく、というかジヨウモンが出している空気から、自分が
失礼なことを言った事が分かったのだ。

気まずそうに黙る一路に、ジヨウモンはようやく振り返る。

「ま、まあ気にするな。鷲の像はブロンズ像というイメージが少
年の中では強かったのだろう。…しかし、少年が気にすることはな
い。私は別に気にしていないからな。……まあ、何故私が縄文土器
として作られた理由は分からないけどな。」

ジヨウモンはそう言うと、これまた人の浮かべるような悲しい笑
みを一路に向け、こちらに背を向け先に進む。

理由は分からないが、自分が縄文土器であることを少なからず気
にしている様子だった。背中がそれを語っている。

「なんか…ごめんなさい。」

「きにするな。」

気まずい空気の中、一路はジヨウモンに案内され、部屋に向かって黙々と歩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3813z/>

不思議な（非）日常

2011年12月17日02時57分発行